
1/100

輪廻

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

1 / 100

【Nコード】

N6733Y

【作者名】

輪廻

【あらすじ】

神に選ばれし100人。

全員にある力が授けられた……

主人公について　　ゝ何事も始まるまでのディテールが重要だと考えるゝ

主人公

神道しんどう　幽鬼ゆうき

世界有数の財閥である神道グループ会長の一人息子

身体能力はほぼ皆無。友人に言わせれば本気でチワワと戦っても負けるらしい。

しかし学習面では素晴らしい成績を持ちそれ故か何でも少しでも出来れば応用し神域に達することができる

性格は悪劣非道を極めた者を演じようとしているが、基本的に正義感が溢れている

現在進行形で中2であり勿論中2病気味

ゲームやアニメには全く興味が無く基本的には何時も本を読んでいる

プロローグ 正義とは犠牲と偽善の上に成り立つとふと思う (前書き)

これが第0話になるようなストーリーにする予定

プロローグ 正義とは犠牲と偽善の上に成り立つとふと思う

a m 5 : 0 0

「何時も通り変わり映えのしない朝だ。」
そんな事を呟きつつ俺は目覚めた。

a m 6 : 3 0

着替えが終わり朝食も食べ終わった。
俺はテーブルを離れ部屋の外で待っているであろう執事に声をかけた。
「そろそろ時間だ車を出しておけ」

a m 7 : 0 0

俺を乗せたリムジンは問題なく最寄りの駅までたどり着いた。
親父の命令で俺は今、社会活動の学習という名目において登校に電車を使う事を義務づけられている
全く迷惑な事だが親父直々の命令である為断れないのが現実という物である

a m 7 : 3 0

ガキが一人ホームから落ちた
恐らく混雑しているこの駅で群集に押されでもして落ちたのであろう
「俺には関係は無い」
そう言っただけで無視していたがとうとう電車が来てしまったようだ
誰か助けてやれ

a m 7 : 3 1

まずい誰も助けず、誰も気づかず電車の到着を知らせるアナウンスが流れている

「助けなければ」

俺はそう呟いてホームから飛び降りた

a m 7 : 3 2

俺はガキを抱えあげ、ホームに投げあげた

制限、ホームに届いたらしく、上の群集からどよめきが聞こえた
当然であろう

何も居ないはずの線路からガキが飛んできたのだ

驚かない訳が無い

それによるとよめきだろう

俺はそう思った

a m 7 : 3 2 : 3 0

違った

それに気付いた時にはA T Sつまり自動列車停止装置の働いた巨大な鉄の塊があと数c mのところまで来ていた

「これが、これこそが逃れようのな……」

グチャ

そんな音を駅に響かせながら、中2病な台詞を言い終わる前に俺は……

a m 7 : 3 3

俺は馬鹿だった……

あんなガキの為に挽かれるとは挽き肉の様にグチャグチャで真っ赤
な肉塊に成ってしまうとは……
悔やんでも悔やみきれない
だが最期に正義を成せて良かった

プロローグ 正義とは犠牲と偽善の上に成り立つと思ふ (後書き)

神道 幽鬼

DEAD END

第一話　く大体バトルの一話はつまらない（あくまでも個人の感想です）く

短話でちやかちやか進めようと決意しました

第一話　く大体バトルの一話はつまらない（あくまでも個人の感想です）く

？：？？？

「ここはどこだ？」

呟きつつ周りを見れば明らかに異常な空間である

床、天井の差別は無く何も無い

否、一つだけある

微かな光を発しているそれが何かはわからないが確かにある

カツ

光が一際強く輝き気付いた時には目の前に白髪、白眉の老人がいた
老人は言った

「我、神なる者なり」

「は？」

「正義である君に力を与えよう」

「ボケてるのか？お前は誰だ？」

「…空…能力でよいな？」

俺の疑問をよそに強制展開するイベント

質の悪い夢をみているようだ

「つと言うか何重要そうな事小さい声でボソッと言ってたんだ空気の
能力つったのか？」

「神よ彼に再び命の炎を灯したまえ」

「お前は神じゃ無いのかよ」

「さあ神道 幽鬼よ蘇れ」

「ちよつ待った説明くれ……」

重苦しい口調を捨ててまで言った願いは通じなかった

第一話　く大体バトルの二話はつまらない（あくまでも個人の感想です）く

神降臨

真偽は不明

第二話　く一難去ってまた一難、最初の一難で死んだら後はないのだろうか？

今話は覚醒

第二話　一難去ってまた一難、最初の一難で死んだら後はないのだろうか？

am7:34

「……ないのかよっ!？」

俺は叫んでいたあの神野郎への最後の言葉の続きを
駅のホームで

「んなバカな」

「何で生きてんだアイツ」

「た、確かにひかれてたのに……」

「キヤー!!!!!!!!!!」

様々な声や悲鳴が駅で飛び交う

「つくソあんの神野郎説明もトリックも使わず本人として蘇らせ
やがったな…… お蔭で俺は電車に挽かれても死なない不死身で急に
奇声をあげる狂人のようだな」

言葉の途中で自我を取り戻し口調を治したらしい

(取り敢えずは群集共を鎮めねば)

そう考え

「ワーワー騒ぐな群集共こう言うホームにはな大体逃げ込む為のス
ペースがあるんだよ、俺は其処に間一髪入り込んだ只それだけだ理
解できたか？」

最大限凄んで壮大な誤魔化しの御託を並べ立てた

それは割と効果が合ったようだった

「さあ散れ群集共邪魔だ。俺は上に登る。」

言いつつ上に登ろうとする。

しかし体力が無いので登れない

モタモタしている間に電車の到着を知らせるアナウンスが流れる

「また死ぬ訳にはいか無いな蘇れ無い可能性もある」

眩きつつ冷や汗をかいた

am7:36

電車が駅に到着せんとスピードを緩めつつ停車の体制に入る

「本格的にマズいな」

あと数cmで俺にあの憎き巨大な鉄の塊がぶちあたる

そう思った次の瞬間俺はあの神野郎の台詞を思いだした

「あいつは確かこう言ってたか？『空気の花』って」

刹那フリーフォールなどで感じるあの腹にくる妙な感覚が生じ俺は、
「……俺は今飛んだのか？あの神野郎マジで神だったかこれが『空
気の花』ってヤツか……」

助かった事による安心感と二度の危険による疲労感により俺は意識
を失った

第二話 一難去ってまた一難、最初の一難で死んだら後はないのだろうか？

次話から本題予定

第三話　く何故、神は人を素直に蘇れらせられないのか？く

a m 8 : 0 0 【神通学園】

さて、俺も学生なものでやはり学校にかよっている
ということで此処が我が学園「神通学園」である
只、今日はいつもとは少し違うあの忌々しい電車事故に関する事情
聴取が一時間後に行われる
よって俺は一時間目特例免除の措置をとられたのだ

「丁度良かった」

俺はそう呟いた

何が丁度良いのかそれは十分ほど時を遡る

a m 7 : 5 0 : 5 1

俺は駅員室で目を覚ました

否、正確には駅員室らしき部屋だ

不思議な事に部屋には年齢のよく判らない男一人しか居なかったのだ

「神道様お目覚めになられましたか」

不意に男の方から話し掛けてきたのだ

「お前は誰だ？ここはどこだ？そして俺にはお前の話を聞くほど時間
は無い今日は8 : 0 0 から朝礼があるんでな。」

「失礼ながら神道様のご意志では退室は出来ないようになっております」

「何の話だ？」

俺は扉を探し……探し……探……

「扉が無いじゃないか」

「お気づきになられましたか。申し遅れましたが私は神の使者、佐藤とでもお呼び下さいませ」

「お前今適当に日本一多い名字名乗っただろ」

「時間に関しては御安心下さいませ今回のゲームの説明が終わります迄、凍結させていたいております故」

「凍結？」

俺はふと時計を確認した

「a m 7 : 5 0 : 5 1」俺はふと壁の時計を確認した

「a m 7 : 5 0 : 5 1で止まっているな」

さらに念のためポケットから携帯電話を取り出し時間を確認するがやはりa m 7 : 5 0 : 5 1で止まっている

「さて、ゲームの説明に移らせて頂きます」

「待った。その前にゲームって何だ？」

「失礼ながら神道様に『能力』を授けた者から何も聞いてはいらっしゃらないのですか？」

「聞いてないが？」

「失礼致しました。それでは私が説明致します。先ずはこちらをご覧ください」

そう言われた直後俺は頭に軽い痛みを感じ、意識を失った

第四話 く規則通りに世は動かず、マニュアル通りに人は生きられないく（前

佐藤（偽名）による説明の回

第四話　く規則通りに世は動かず、マニュアル通りに人は生きられないく

【神道　幽鬼の精神世界】

？M？：？？

「これもお前の能力なのか？佐藤（偽名）とやら」

「いえいえこれは神道様のお力をお借りしたままで御座います。」

「俺の力？『空気的能力』の事か？」

「……空気？何の事で御座いますか？」

「は？空気じゃねえのかよっ！？」

あんの神野郎ハッキリ言えってんだよ
俺は心の内で毒づいた

「じゃあ何なんだ？」

「神道様のお力は『時空の能力』即ち時と空間を自在に司る唯一無
二の能力で御座います」

「……チート級の最強能力じゃないか？」

「さて、説明を続けさせて戴きますが、まず最初に神道様の意思確
認を行います。」

「意思確認？」

「はい。今回、神道様は命尽きる所を強制的に救われ望んでもいら

つしやらない能力を移植され更に能力者によるゲームに参加させられそうになっております。」

「確かにそうだがそれがどうした？」

「私共と致しましても参加の意思のない方が嫌々参加されますのは不本意で御座います。そこで……」

「俺が参加したいのか否か確認したいと言うことだな？」

「お察しが良いようで」

「俺は参加しよう」

言った直後俺は光に包まれた

否、正確には携帯電話が光に包まれた

「携帯電話を超能力者専用端末とさせていただきました。これにより従来の携帯電話の機能に追加して今回のゲームのルールブック、数力特典の確認、超能力マニユアルを収集、閲覧する事が出来ます。」

「おお、確かにあるな、ん？『火炎の能力』？おい、俺の能力のマニユアルじゃねーじゃねーかよ！」

「そこが今回のゲームの要で御座います。」

「は？」

「今回のゲームではあなた方にマニユアルを奪い合っていたいただきます。期間は2ヶ月間、攻撃は無制限、奪う際の手段は問わずです。」

つまり殺しても騙しても同盟を組んでも多対一でも寝込みを襲っても何でもあると言うことです。2ヶ月後自分のマニュアルを持っていた方が第一関門の通過者となります。」

「つまり第二関門以降もあると」

「はい、神道様の仰る通りで御座います。」

「敗退したら何か罰でもあんのか？」

「どうやら神道様は勘が鋭い様で御座いますね。」

「……つまりあるのか」

俺は身震いをした

「はい、敗退した方は敗北したという自覚を持ったまま自分が神に助けられず死んでいた過去へ戻されます。」

「負ければ『死』って事か……」

「では質問も尽きた様ですので説明を終えさせていただきます。」

「ちょーっと待った！」

「何でしょうか？私忙しいのですが……」

「おい、佐藤（偽名）明らかに嫌な顔すんな」

「んで？」

「おいコラ面倒だからって態度悪くなんなよ」

「さっさとして戴けませんか。帰りますよ？」

「数力特典って何だよ」

「ああその事ですか。……説明メンドクセーな」

「聞こえてんぞ」

「あなたは100人中100番目の能力者として特典に『最強の能力』が与えられております。他の方では

1、7、10、20、30、40、50、60、70、77、80、90、99の方々に特典があたえられる事に規則では定められております。では、失礼を」

「えっ、あっ、おい待……」

俺は気を失った

第四話 く規則通りに世は動かず、マニュアル通りに人は生きられないく（後

纏まらず異常な長さに……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6733y/>

1/100

2011年12月3日22時55分発行